

# スポーツマネジメントがつなぐ 人の輪と新たなコミュニティ

竹中 英泰

二〇二四年四月一日、旭川市のスタルヒン球場は四〇周年を迎えた。老朽化にともない一九八四年に改築された市営球場には、スタルヒンの名前が冠された。新しい球場の入り口では、振りかぶって投球に向かうスタルヒンのブロンズ像が高校野球やプロ野球を見に来る観客を迎えている。

ヴィクトル・スタルヒンは、帝政下のロシア生まれ（一九一六年）。父親が青年将校として皇帝に仕えていたこともあって、家族は革命後の戦火をくぐって亡命の日々を送る。ウラル山脈を越え、シベリアから満州・ハルピンを経て、一九二五年に旭川にたどり着いた。ロシアパンを焼きミルクホールを営む家族のもと、九歳になったスタルヒンは、旭川市立日章小学校に入って野球をおぼえる。大きな体格で運動神経が良かったことからすぐに頭角をあらわした。旭川中学校（旧制）に進むと、全道大会では注目の的になる。初年度は準々決勝で敗退するも、二年次・三年次には準優勝に導いていた。

プロ野球のまだないこの時期の花形は大学野球、本人も周りも早稲田大学への進学を熱

望していた。そんな時、全米オールスターチームが来日する（一九三四年）。迎える全日本選抜チームの編成は、野球統制令下で現役大学生を除く混成チームとなる。すでに京都商業を中退していた沢村栄治に加えて切望されたのがスタルヒンだ。ベーブ・ルースやルー・ゲーリックを含む全米チームとは、一月二日～二月一日に一八戦が組まれていた。一月二〇日の草薙球場での沢村栄治投手の好投（〇対一で敗戦）もあったが全敗だった。ともあれ、主催した読売新聞社は、盛り上がった野球人気を背景に一月二六日に大日本東京野球倶楽部（現・読売ジャイアンツ）を設立し、一九三六年からのプロ野球リーグ戦への道筋をつけていた。参加が遅れていたスタルヒンに目を戻すと、一月二九日の京都での試合に救援登板した。このとき、ベーブ・ルースやルー・ゲーリックたちと対峙していたのだった。

二〇一六年六月七日のセパ交流戦に先立ち、当時北海道日本ハムファイターズに所属していた大谷翔平選手は、スタルヒンの母校、旭川市立日章小学校を訪問し、子どもたちと交流した。日米の投打の二刀流は、スタルヒ

ン（球場）を介してつなげられた過去と未来のループ上で、子どもたちに夢を運んでいた。二〇二三年三月三〇日、北海道日本ハムファイターズは、本拠地を札幌ドームからエスコンフィールド北海道に移しての初戦を戦った（対楽天戦）。新球場への移転を検討し始めた球団側と、きたひろしま総合運動公園の整備問題を抱える北広島市は、二〇一八年一月に合意に至り、二〇二三年三月開業に向けて、いわゆるボールパークづくりが走り始めた。北広島市側（北海道などを含む）は、三三畝の広大な敷地の無償賃貸、インフラ整備費の負担、球場その他の公園施設に対する固定資産税と都市計画税の一〇年間免除で誘致に臨んでいた。ファイターズ側は日本エスコンなどをパートナーに、ボールパーク・Fビレッジ構想推進への六〇〇億円の投資が動き始めたのである。

二〇二三年九月、北海道医療大学は、①全学部に加え、歯科クリニックと札幌市北区の大病院も移転、②移転先はJR北海道が計画する新駅近くで、現在駐車場として使われている土地（約一万七七〇〇平方メートル）、③整備費用は約四二〇億円、との移転構想を発表、二〇二八年四月の北広島市のFビレッジへの移転を見込むとしている。

新球場建設という形のスポーツマネジメントは、JR新駅や大学キャンパス移転などを巻き込み、新たなコミュニティ形成を視野に入れていく。

へたけなか ひでやす・旭川市立大学名誉教授